

小規模で憂鬱なわたしの冒険

作・盛岡一高演劇部（生徒顧問創作）

【登場人物】

イツキ	高校2年。	内向的。不登校気味。
アンナ	イツキの姉。	
タエ	高校2年。	イツキの親友。
ソウタ	高校2年。	タエの彼氏。
シヨーク	高校2年。	イツキのクラスメート。
カナエ	高校2年。	イツキのクラスメート。

1 プロローグ

緞帳は上がったまま、暗転幕が下がっている。

はじまりのベルの後、照明がつく。

シヨールコとカナエが登場。

シヨールコ どうも

カナエ どうも

シヨールコ どうも。前説です。

カナエ え、前説なの？

シヨールコ まあ、みたいなもの？

カナエ （なんて呼ぶのか迷いながらシヨールコを指さして）あなた、のこと、シヨールコ、さん、だと思ってた。

シヨールコ シヨールコだよ。

カナエ でもマエセツって。あなた、マエダセツコ？

シヨールコ なんて略称なんだよ。キムタクか。

カナエ もしかして、マエカワセツオ？

シヨールコ なんて男。（無視して）

えーこれから、「学校に行きたくない女子高生」についてのお話をします。

え、シヨールコ、学校に行きたくないの？

まあ、それなりに…？

（深刻に）そっか…何でも話していいよ？

ちがうよ、イツキちゃんのことだよ。

（納得して）ああイツキちゃん…じゃあ、あたしたちは…？

脇役です。

脇役かー。

シヨールコ イツキちゃんは、今から約3分後に登場します。

カナエ 脇役かー

シヨールコ （無視）学校に行きたくないときは、どんなときですか？

カナエ え、シヨールコからでしょ。

シヨールコ 雨降ってるとき。

カナエ うんうん、あるある。

シヨールコ 濡れるし、ノートもジメるし。

カナエ 自転車で降られると、制服も靴も濡れるし。

シヨールコ あたしは車で送ってもらえないけど。

カナエ ああ、そう。

シヨールコ あと、プールがあるとき。

カナエ あたしはないかな。

シヨールコ バスタオルが小さくていや。

カナエ それはシヨールコだけ。

シヨールコ 水着が乾いてないときもいや。

カナエ 早く乾かしてよ。

シヨールコ カナエはどうなの。

カナエ 自販機のアクエリアスが売り切れのとき。

シヨールコ 小っちゃいなー

カナエ シヨールコは？

シヨールコ ミルクティが売り切れのとき。

カナエ あ、そっち。

シヨールコ ベストは紅茶花伝。

カナエ 甘すぎない？

シヨールコ 女子高生は紅茶花伝でしょ。

カナエ 友だちと上手くいってないときも、学校いやだよね。

シヨールコ あー。女？ 男？

カナエ 両方。

シヨールコ 男と女ともめてるの？

カナエ 三角関係…とか？

シヨールコ それはいやだー。二人で（自分とカナエを指さして）一人を取り合ってる…

カナエ ってこと？

シヨールコ なに、あたしが好きな男子を、カナエも…

カナエ ってこと？

シヨールコ え、どーゆーこと？

カナエ え、え、

カナエは逃げ、シヨールコは追いかける。

二人とも袖に入り、すぐにシヨールコが戻ってくる。

シヨールコ ご観覧のみなさまにお知らせします。

みなさまお気づきかと思いますが、すでに芝居は始まっています。

この幕が開いて少したつと、学校に行きたくない女子高生伊ツキが登場します。

シヨールコ、足早に退場。

照明消える。

暗転幕が上がる。

2 イツキとアンナは紅茶花伝を考える。

照明明るくなる。

アンナが一人ダラダラしているところに、
イツキが、制服で鞆をもって登場。

アンナ あれ、イツキ早いねー、もう戻ってきた。

イツキ うん、今朝はやめた。午後からにする。

アンナ 今日はなに？

開かずの踏み切り？

それともラーメン屋のおっきな犬？ それとも学校の正門がなぜか閉まってた？

イツキ 紅茶花伝が売り切れてた。

アンナ なに？

イツキ ほら、信号のカドの自動販売機。

アンナ あー

通学のお供に買っていいこうと思ったら、売り切れてた。

アンナ 紅茶花伝？

イツキ、メモ帳を取り出し、何かメモする。

イツキ メモメモ…っと。

あそこの自販機は、なぜかいつも紅茶花伝だけ売り切れ、っと。

アンナ そんなの、町内に紅茶花伝好きがいる、ってことでしょ。

イツキ もうそんなに人は残ってないよね。

アンナ 誰かいるんだよ。ご町内に、紅茶花伝ひとすじの人が。

イツキ 頑固だね。

アンナ だからなかなか立ち退かないわけで。

イツキ みんな、立ち退かないとは言っていないでしょ、少し…待ってもらってるだけで。

アンナ みんなって言うても、残ってるの、この棟は田中さんとうちだけだよ？

イツキ うん。

イツキとアンナ、身体のあちこちを押したり引いたり伸ばしたりする。

何かの準備体操か？ ストレッチか何か？

アンナ 田中さんで、なんで？

イツキ なんか、おばーさんが、ほら、老人ホーム？ 施設に入るのに、空きを待ってる

んだって。

アンナ 田中さんのおばーさんって…

イツキ ？

アンナ　　なんでもいつも下着なの？
イツキ　　あー、
アンナ　　あの、なんてゆうか、白いワンピースのような下着…
イツキ　　シュミーズ…？
アンナ　　なにそれ？
イツキ　　シュミーズ…とかって、聞いたことある…
アンナ　　何それ、昭和？平成？
イツキ　　…
アンナ　　あれ何？
イツキ　　いやー…
アンナ　　あれ、セクシーなの？
イツキ　　いや、セクシーはねらってないでしょ。
アンナ　　百歩譲って、家の中はいいよ、家の中は。
イツキ　　でもあれで閲覧板届けに来たりするよね？あの下着姿で。
アンナ　　いや、昭和だから許してやってよ…
イツキ　　まーあたしが許すもないけどさ…
アンナ　　

二人、体勢を変える。

イツキ　　田中さんのおばーさん、紅茶花伝、好きだよ。
アンナ　　ふうん、
イツキ　　おばーさんが紅茶花伝を買っているところ、2回、いや3回か、3回は見たことある。
アンナ　　え？　なにそれ？
イツキ　　え？
アンナ　　もしかして、紅茶花伝を買い占めているの、田中さんのおばーさんじゃない？
イツキ　　ええ！？
アンナ　　ええ！？
イツキ　　…なんで？
アンナ　　え？　なんでって？
アンナ　　なんで買い占めるの？
イツキ　　ええ？　紅茶花伝を…好きだから？
アンナ　　ちがうね。
イツキ　　好きじゃないの？
アンナ　　好きだね！
イツキ　　どっちよ。
アンナ　　好きは好きでも、好きなのは紅茶花伝じゃなくて、
イツキ　　…じゃなくて？
アンナ　　自動販売機の、商品の、入れ替えのお兄ちゃんのが好き！
イツキ　　えー！？

アンナ そう。

紅茶花伝が売り切れたら、お兄ちゃんが商品持ってやって来るでしょ。「なんかここだけ紅茶花伝がよく売れるな」とか言いながら。

イツキ そのお兄ちゃんに来てもらいたくて、

アンナ 紅茶花伝を！ 買い占めてるわけだ。

イツキ …お兄ちゃんが自販機の入替えしてるのを物陰から、

アンナ …そっとのぞいているのが、田中さんのおばーさん。

二人、そろってため息。

イツキ でもなんで紅茶花伝？

アンナ ほら、あれよ、どれかに集中したほうが効率いいでしょ。

イツキ ああ。

アンナ 選択と集中よ。

イツキ うわー、それは考えなかったわ…

アンナ ロミオとジュリエットみたいじゃない？

イツキ え？

アンナ 略してロミジュリ。

イツキ どこがロミジュリ？

アンナ てゆーか、それって、自販機のお兄ちゃんもおばーさんのこと好きってこと？

イツキ いや、そこはやっぱり、おばーさんの片思いで。

アンナ (真剣に) だよな。

アンナ でもかわいくない？ 田中さんのおばーさんの女心…

おばーさん、精一杯がんばってるんだよ？

イツキ え？ どんなふうに？

アンナ あ！ …セクシー攻撃とか…

間

二人 あー！

(声をそろえて) だから下着姿なんだ…

3 イツキだってたまには学校に行く。

教室。 イツキとショールコとカナエ。

ショールコ　だからイツキちゃんは、クラス新聞の原稿、このあたりをやってほしいんだけど。

イツキ　うん、わかった。

カナエ　ごめんね、多いうな気もするけど、班の人はみんな同じくらい書かなきゃいけないから…大丈夫だよ？

イツキ　うん大丈夫。

ショールコ　締め切りが来週の月曜日で…班の中でも合わせなきゃならないから、私達の締め切りは金曜日で。
イツキ　わかった。

イツキ、メモ帳にメモする。

カナエ　ごめんね、時間短いようだけど、先生から言われたの、先週だったから。

イツキ　あ、そうなんだ。

カナエ　イツキちゃんに言う時間なくて。

ショールコ　イツキちゃんて、ラインやってないんだね。

イツキ　あ、うん、ごめん。

間

ショールコ　じゃあ、イツキちゃんの前稿、どう受け取ればいいかな？

イツキ　え？どうって。

ショールコ　カナエとも言ってたんだけど、

ほら、イツキちゃん、学校に来なかったら、

イツキちゃんが分担した記事書いたとしても、私たち受け取れないじゃない？

イツキ　あ、それは。

カナエ　あ、ごめんね、でも一応、イツキちゃんが来なかった場合？　を、考えて…

ほら、イツキちゃんが来なくても、イツキちゃんはイツキちゃんの分を出しても
らえばいいわけだから。

でも、ラインしてないなら…

ショールコ　わたし、来るから。

イツキ　んんん、そうは言っても。

ショールコ　いや、約束は、うん、できないけど、でも、うん。

カナエ　ごめん、考えたんだけど、ほら、ラインがダメでも、原稿を送ってもらえばいいんじゃないかと。

シヨールコ ああ、自宅のパソコンから？ とか？
カナエ ああ、でも私、どうやればいいかわかんないよ？
シヨールコ えー、でもー
イツキ あ、うち、パソコンなくって。
カナエ あ、そうなんだ。

シヨールコとカナエ、顔を見合わせる。

そこにタエとソウタ現われる。

タエ いたいた、イツキー！
ソウタ ほら、今日来てたでしょ。

タエ、イツキに抱きつく。

タエ イツキ、久しぶりー
ソウタ よっ、イツキ。

あー、あたし今週、イツキ成分不足だったー。

ソウタ イツキ不足。
タエ やっぱ、イツキと同じクラスじゃないの、痛いー。

しかもー組と6組ってー。離れすぎだし。

校舎の東と西だし。

ソウタ 南と北じゃね？

え、でも夕日はこっちから出るでしょ。

ソウタ 夕日は出ない。

え？ 何それ？

イツキ (唐突に大声で) ふあつくす！

みんなびっくりする。

ソウタ ふあっ？

イツキ うちから！ ファックスで送るから！

タエ・ソウタ え、なに？

シヨールコ・カナエ ファックス？

イツキ でも、来るから。いや、たぶん、だけど…絶対、割り当て、やって、で…(だんだん声は小さく)
ファックスで送る… (大きく) 送ります！

間

シヨーク ……ファックスねえ…

カナエ ファックス…

イツキ (立ち上がり) わたし! 帰らなきゃ。

タエ え? イツキ? なんて?

もうちょっとしたら3人で帰ろうよ。

イツキ 見積もり!

引越し業者さんの見積もりが来るから。

タエ あ、イツキ、引越し決まったの?

ソウタ イツキんち、立ち退きっていつなの?

タエ バカ。(シーツ)

シヨーク 立ち退き?

カナエ 引越し?

イツキ そう! (突然ハイテンションに、早口になる。)

うちね、引越しするの。ううん、ホントはまだ決まっていんだけど、引っ越しするかもしれないの。

今の住宅から、どこか別のところに。でね、いろいろ忙しくって。

ほらうち、父ひとり子一人だから。お父さんは夜勤でほとんどすれ違いだけ。

こう見えても、私が主婦代わり、ってゆうの? いやお父さんはそう思っていないと思うけど。

そうゆうわけにもいかないよね。だから私がいろいろ準備しなくちゃいけない。

て。

本当はひっこしするの、嫌なんだけど。ほら、プレハブなりの愛着というか、震災のときからずっと住んでる住宅だしね。

あ、こんなこと言うと、タエにはそんなことまで言わなくていいって言われるけど、でもね。

シヨークとカナエ、いつの間にかいなくなる。

タエ イツキ…?

イツキ、メモ帳を取り出して見る。

イツキ あ、「家族にカンパイ」も予約しないといけないし。お父さんに頼まれてたの、忘れてた。

タエ イツキ!

イツキ タエたちだって、二人の方がいいでしょ。ごゆっくりどうぞ!

タエ イツキ。

イツキ さあ、急がなきゃ。「つるべえの家族にカンパイ」!

タエとソウタを残して、イツキ、ダッシュで走り去る。

ソウタ つるべえ？

4 イツキとアンナは息を止める。

アパート。イツキとアンナ。それぞれ洗面器を前にしている。

アンナ つるべの家族にカンパイ。

イツキ は？

アンナ つるべえ、じゃなくて、つるべ。

イツキ は？

アンナ しょーふく亭つるべ…ん？ 三遊亭？ 明石家？

イツキ どっちだっていいよ。

じゃ、位置について。

え、え、

アンナ 用意、スタート。

イツキ

二人、洗面器に顔をつける。

水に顔をつけて、息を止める競争。

少しすると、イツキ、じたばたし始め、わりとすぐに顔を上げる。

イツキ あー、だめだめ…だいたい私、プールだってダメだし。

イツキ、アンナを待つ。

アンナは微動だにしない。

イツキ あれだよね、あんまり人と話してないから、テンションがわからなくなるってゆうか、

ずっと黙ってるか、こうずっとしゃべっちゃうか…で、自分のことばかり話して。

あー、自分のことばかり話してた…、ってなる。

あ、メモしとこう。自分のことばかり話しすぎ…っと。

ほら、シナリオとかあればいいと思わない？

あなたの台詞の割り当ては、ここからここです、とか決まってる。

そうすれば安心して、自分の番だなーって、落ち着いて話せるから…

…

間

イツキ
（メモ帳を見て）つるべえ？つるべ？

間

イツキ
（突然）アンナ！ 死ぬ！

死ぬってば！

イツキ、大慌てでアンナの体勢を戻す。

アンナ
（息を切らして）あー、死ぬかと思った。
イツキ
死ぬかと思った。
アンナ
死ぬかと思った。

間

イツキ
いや、死なないか。
アンナ
死なない。
イツキ
うん、死なない。
アンナは、死なない。

アンナ
ブブー
アンナ？

アンナ
はずれー。

イツキ
：

アンナ
死んでまーす。私は死んでまーす。
アンナ。

アンナ
私は8年前からずっと死んでまーす。

イツキ
ウソ。

アンナ
ウソじゃないもん。

イツキ
じゃあなんで、この間から突然…ほら、その…出て、きたの？

アンナ
え？ この間？

イツキ
うん、この間。アンナ、唐突にここに、

アンナ
この間っていつよ。

イツキ
：

アンナ
メモ帳見たら？

イツキ、しぶしぶメモ帳を見ようとするが
アンナがそれを覗こうとするので

イツキは体をひねってのぞかせないようにする。
アンナは結局覗けずに、

アンナ　そもそもメモ帳で。

いまだきスマホじゃなくて、メモ帳で。

イツキ　この間見つけたやつだもん。

アンナ　この間？

イツキ　アンナの、残ってた荷物の中から、この間…

5 ショーコとカナエがテストを語る。

ショーコとカナエ。

それぞれ紙を手を持っている。

二人、なんだかわからないけど、空笑い。

ショーコ　（突然）はーっ。（ため息）

カナエ　はーっ。（ため息）

ショーコ　学校に行きたくないとき、その5！

テストの結果がでるとき。

カナエ　あるあるー

ショーコ　それに（この）模試。これが結構あるし。

カナエ　進研模試、駿台模試、ハイレベル模試…

ショーコ　しかも土日に。

カナエ　ブラックか！

ショーコ　ハイレベルって何だよ。おい。

カナエ　あたし最初、スンダイってどこの大学かと思った。

ショーコ　え、大学じゃないの？

カナエ　え？

間

ショーコ　模試のほうで期末考査よりずっといい人っているよね？

カナエ　あーねたましいね。

ショーコ　「私、普段は勉強してないんだけどー、模試だけはよくってー」とか。

カナエ　「ごめん、なんか取れちゃってー？」とか、

ショーコ　…イツキちゃんてさ、

カナエ　あー、イツキちゃんね、

シヨールコ ふだん全然なのに、駿台の、いいよねー？
カナエ あー、

シヨールコ 学校来ないで、勉強してる、とか？

カナエ えー、塾行きっぱ、とか？

シヨールコ いや、それはないらしい。

カナエ 言ったらなんだけど、ごめん、地頭系？

イツキ登場。

シヨールコとカナエは気づかないで話を続ける。

シヨールコ 模試なら、メルカリで買う手がある、って聞いたことがある。
カナエ え、ごめん、なにを？

タエとソウタ登場。

シヨールコ 模試。テスト問題。

ほら、基準日より前に実施する所、あるでしょ。テスト問題が売りに出たりするんだって。

カナエ あ、それを事前に買って？

うわー、そんなこと、するー？

シヨールコ いや。人の話聞いたただけだって。

カナエ だいたい、それ、意味ある？ 模試の成績だけ良くても意味なくない？

シヨールコ そうなんだけど。だから聞いたんだって。

カナエ え？ それ誰の話？

シヨールコ いや誰とは言わないけど。

カナエ え？ イツキちゃん？

と同時に二人はイツキに気づく。

イツキ あ、おはよう。

カナエ あ、おはよう。

シヨールコ こんにちは？

シヨールコとカナエ、立ち去る。

タエとソウタ、二人を見送る。

ソウタ なんだよ、あれ。

タエ 遅い！

ソウタ え？

タエ さっき怒ればよかったのに！（ソウタのほうを見る。）

ソウタ え、おれ？ 今の、おれですか？
タエ 怒ればよかったのに！

イツキ タエ。

タエ ソウタはいつも受け身！

ソウタ だから、なんでおれ？

タエ ソウタは肝心なときに言ってくれない。

ソウタ 何それ。

イツキ ケンカしないで。

タエ え？ ケンカ、って。

ソウタ いや、イツキ…。

イツキ そうか。肝心なときに言わなきゃダメか。

うん、タエ。ほんとそうだよね。

タエ イツキ…

イツキ やだ、タエ。そんな深刻にならないで。

あ、メモしなきゃ。

自分のことは自分の口で言わなくちゃダメ…と。

タエ イツキ…

あ、それより、二人のこと、少しわかった。

タエ え？

ソウタ なに？

イツキ タエとソウタくん、告白したのどっちだろう、って思ってたけど、

タエのほうだったんだね。今のでわかった。

6 イツキとアンナは告白する。

音楽

イツキとアンナ。

イツキが告白する女子、アンナが振る男子役で。

告白その1。

アンナ 話だったら教室でもできるんじゃない？

イツキ あ…うん、でもすぐに終わるから。

アンナ ふうん。

イツキ あ…暑いね、なんか。

アンナ むしろ冷えない？ここ。

イツキ あ…そうね、

アナ　なんか、告白とかするカンジ？
イツキ　（大声で）えっ！！　え、どうして！？
アナ　（逆にびっくりして）え？！

間

イツキ　そうゆう…ことなんだけど。
アナ　ごめ（言いかける）
イツキ　あっ！　そんなすぐに！　すぐにじゃなくていいから。
アナ　いや、すぐに！
イツキ　すぐじゃなくて！　せめて1週間。　いや3日！
アナ　いや、こうゆうのは、オレ、すぐじゃないと気持ち悪いってゆうか、
イツキ　せめて1日！

イツキ逃げ回り、アナ追いかける。
イツキ、回転しながらステージを通過して、最終的にステージ真ん中でアラベスク。

イツキ　やめてー

音楽
アナ戻ってくる。

告白その2。

アナ　話だったら教室でもいんじゃない？
イツキ　あ…うん、でもすぐに終わるから。
アナ　ああ…
インキ　あの、手紙さ、
アナ　ああ、うん。
イツキ　読んでくれた？
アナ　読まない。
イツキ　（大声で）なんで？！
いや、今どき、今時だよ？　手紙って意味がわかんない。
しかも手紙はなぜか手裏剣型？　手紙を手裏剣に折るのって、なに？　おまえ、
忍者？
いや読んでよ。
イツキ

イツキ、ポケットから手裏剣（型手紙）を出して、手裏剣風に跳ばす。

アンナ 意味わかんねー。

アンナ 逃げ惑う。

が、そのうち体にぶつかった一つをつい手に取ってしまう。

イツキ だから、気持ちだって！

（後ずさりしながら、少しずつ大声で）

あたしの、きーもーちー！！

アンナ 待てよ！

イツキ、立ち止まり振り返る。

アンナはスタスタとイツキのそばへ。

アンナ だから、おれ、こうゆうの、迷惑だから。

アンナ、イツキの後ろから抱きかかえるような形で腕を回し

イツキの目の前で手紙を破る。

イツキ、自分の顔を手で覆う。

イツキ やめて…

アンナ戻ってくる。

アンナ ねえなんで、これ全部、したたかに振られるパターン？

イツキ 練習だから。

アンナ え？ だって、イツキ、自分から告白とか絶対しないよね？

イツキ それでも。

アンナ なんのための練習？

イツキ …傷つく練習。

アンナ ふうん。

イツキ なに。

アンナ 告白される練習は？

イツキ 告白なんてされないし。

アンナ されたことあるじゃん。

イツキ …？

アンナ あ、あれは幼稚園のときだし。それに相手だって、ソータくんだったよね。

イツキ …

アンナ メモしないの？

メモメモ…

7 タエとソウタは対立する。

音楽

学校。

タエとソウタ。

ソウタ 話だったら教室でもいんじゃないね？

タエ ……どう思ってる？

ソウタ え？

タエ どう思ってる？

ソウタ え？

…だって、つきあってるんじゃない？ おれ達。…ってゆうことはさ。

タエ ばか。あたしのことじゃないよ、イツキのこと。

ソウタ え？ イツキ？ あーそっかそっかー

タエ このままじゃダメだと思うんだよね。

ソウタ いんじゃない？

タエ えっ？

ソウタ 別にいんじゃないね、今のままでも。

タエ はーっ（大きくため息）

ソウタ なに。

タエ だから！ ちかごろみんなそんな感じだからでしょ。

ソウタ そんな感じ？

タエ そう、親も先生も、学校来なくても、いいよいいよってさ、

ううん、学校じゃなくてもいいよ、最低学校来なくてもいいよ。

でもさ、なんていうの、いやなもの全部から逃げたら、どうなると思う？

っていうか、いやなことは避けられないわけじゃない。

ソウタ なに。

タエ だから。多少ね、多少いやなことがあってもね、

こう、がんばって、多少無理してでもね、

そうして学校に来るのが大事なんじゃないの？

ソウタ でも、イツキは、

全然来てないってわけでもないし、いじめられてるわけでもないし、友だちがい

ないわけでもないし、

タエ だからよ。

ソウタ だから、なに。

タエ そもそもイツキは、なんで学校に来ないの？

ソウタ え、

タエ ソウタの方が付き合い長いんだから。

ソウタ いや、オレとイツキは、前住んでたところが近所だってだけで…

タエ 震災？ ねえ、やっぱ震災？
ソウタ いや、それ関係ある…？
タエ やっぱお母さんとかお姉さんとか、流されちゃったから？
ソウタ いや、タエ、なんかそれ、あんまりぶっちゃけて言いすぎ、ってゆうか…
タエ やっぱりするなの？
ソウタ いやなんか、そう簡単に言うのって…
タエ だいたい、学校にこない理由とか、そういうのって、
ソウタ わかった。
タエ ええ？
タエ 理由はいいや、理由は。
ソウタ 問題は、対策よね。
ソウタ 対策？

タエはソウタにまじめに向き直る。

タエ ソウタ。
ソウタ なに。
タエ ソウタが、イツキと、付き合う、とかどう？
ソウタ えええ！？
タエ （ソウタをじつと見る）
ソウタ ええ？ それって…？
タエ 冗談。
ソウタ ええ？ 冗談って、
タエ 考えたら、それ、あんまりよくないわ。
ソウタ あのさ、タエ…
タエ じゃあ（と考える。）
ソウタ ねえ、ソウタ。
ソウタ なに。
タエ あたし、イツキと友だちやめる。
ソウタ ええ？
タエ やめる。
ソウタ ええ？ それはそれで…
タエ やめる、ふりをする。
ソウタ ふり？
タエ イツキに言う。
ソウタ あたしのこと、友だちだと思ってるなら、学校、来てって言う。
タエ それは…
ソウタ だって、なにか、そういうあれ…（なんていうか）きっかけ？
ソウタ そういのがないと、イツキ、ずっとこのままの感じじゃん？
ソウタ それちょっと待って。

タエ 待てない。

ソウタ いや、ちょっと、待ってよ、

タエ なんぞ。

ソウタ あのさ、そうゆう、なんかダメージ大きい目のやつじゃなくて、

おれ、なんとか、なにか、するから。

で、そのあとで、それでもダメだったら、その、友だちやめるとか、そうゆう話してよ。

タエ …

ソウタ な？

タエ …うん。

ソウタ な。

タエ …ソウタ、何するの？

間

ソウタ …うん。

7・5 ラプンツェル

イツキとアンナ。

アンナ 昔々ある所に、田中さんのおばーさんがおりました。

田中さんのおばーさんは、川へ洗濯に出かけました。

はい、つづき。

イツキ え？ わたし？

…田中さんのおばーさんは川で…川で…洗濯をしました。

アンナ えー

イツキ えー、洗濯して服を洗ったので、

白いシュミーズだけになりました。

アンナ 再びシュミーズ。

あ、おばーさんね、この間たまたま見たんだけど、

髪の毛をほどこいたらね、こーんな長いの。

アンナ ふーん。

イツキ いつも（こんな）髷？ にしてるから気づかなかったけど。

アンナ ラプンツェルだ。

イツキ なに？

アンナ ラプンツェルだよ。

おばーさん、塔の上から、髪の毛を、こう、垂らして、恋人を待ってる…
えーロマンチック。

でも塔って、ここ全部平屋だよ。

アンナ　まあ、ロマンチックってことで許せ。

「恋人よ、ここまで上ってきて。髪の毛をつたって。」

ちよっと髪の毛の量は足りないけど。

「行きます。待っていてください。田中さん。」

姫。

イツキ
アンナ
イツキ

え？

アンナ　姫よ、姫。

イツキ　「田中姫。」

アンナ　なんで苗字。

イツキ　だって下の名前知らないし。

アンナ　（まあいい。）田中姫は、塔に住むひとりぼっちの姫。

イツキ　なんかアンナみたい。

アンナ　え？ 私ってひとりぼっちなの？

イツキ　え？ えーと、私がいる時は違うけど。

だから私はここにいますし。

アンナ　： イツキが学校を休むのは、私を一人にしないためなの？

イツキ　：

アンナ　ねえ。

8 ソウタは署名活動をする。

学校。　ソウタが署名を呼びかけている。

ソウタ　署名お願いします。

： 署名にご協力をお願いしますーす。

シヨ！コとカナエ通りかかる。

ソウタ　あ、ねえねえ、

二人、顔を見合わせて笑う。

ソウタ　ちよっと、名前書いてくれるだけでいいんだけど。

二人、笑いながら逃げる。

ソウタ　ちょっと待ってよー。

ソウタ舞台に戻ってくる。
反対側からイツキ登場。

イツキ　ソウタ君、なにしてるの？

ソウタ　おっと、これは一番まずい人に、

イツキ　あ、そうなんだ…（と、立ち去りかける）
ソウタ　違うって、違うから。

ソウタ、イツキの腕を思わずつかむ。

ソウタ　あ、ごめん…（離す）
イツキ　ううん。

間

ソウタ　おれ、今、「テストの名前死ね」運動をやってたよね。
イツキ　テスト、死ね…？

ソウタ　ほら、模試の結果ってさ、上位者の名前が出るじゃん。

1番だれ、2番、って全部出てさ、あれ、常々どうかと思っててさ、
順位なんてさ、自分がわかってりゃいいよね？

イツキ　うん。人には知られたくないかも。

ソウタ　だろ。順位が知られると…ほら、その、まあ、いろいろ、面倒だったりもするし。

イツキ　…うん！

ソウタ　で、進路の先生とこに直談判しに行って、やめてほしいって話したんだよね。

ソウタ　そしたら「お前に関係ないだろ」って小突かれてさ、
じゃあ署名集めてやる、待ってろよ、って、今。

イツキ　ソウタ君、なんかすごい…

ソウタ　あ、でも、先生もあれだよな。「お前に関係ない」って、そんなことないのに。
ああ、リストに載るの、上位百番までのユーシューな人だけだから、

ソウタ　おれ、実際問題関係ないっていうか、
そこまで行ったことないってゆうか、

イツキ　そうなんだ…え、でも、どうして？

ソウタ　え、どうしてって？

イツキ　だって…現実、上位者にソウタ君の名前載らないのなら…
ソウタ　えー！ ひどいなー！

イツキもなにげに失礼だね。

おれだって、永遠に上位者に入らないとは限らないでしょー。
限らないこともない、こともないこともない…？

あれ、どっちだ？

タエ登場。

イツキとソウタは気づかない。

イツキ

やだ、ごめん…（と下を向く）

ソウタ

（イツキの顔をのぞきこみ）え？ 笑ってる？

イツキ、笑ってるでしょ？

イツキは下を向いて首を振っているが、たしかに笑っているようだ。
タエ、イツキとソウタをじっと見る。

イツキ

ねえソウタくん、これって、もしかして（私のため）…？

ソウタ

（気づいて）タエ。

タエ

あ、

タエ、なんかわからんけど逃げる。

ソウタ

え？ え？ なんで？

ちよっとー。

あ、あ、（イツキに）じゃあねー。

ソウタ、タエを追いかけて出て行く。

イツキ一人残る。

イツキは、なんか心が弾んで、つついステップを踏む。

そのまま音楽。

9 イツキとアンナは踊る。

イツキがバレエのポジションを取り、アンナがそれを真似る。

10 イツキは朝から学校に来る。

イツキが登場。

反対側から、シヨールとカナエも登場。

イツキ おはよう。

シヨール え、

カナエ あ、おはよう。

シヨール おはよ。

シヨールとカナエ、イツキをじっと見る。

イツキ なに？

カナエ ううん、ごめんね、なんでもない。

シヨールとカナエ去る。

ソウタ登場。

ソウタ おはよー。あれ、イツキ？どしたの？

イツキ …私、朝から来るのって、そんな珍しい…？

ソウタ いやいや！ 来てくれてうれしいよ。

いや来なくなつて、うれしくないこともないけど、いや、おれ何言ってるんだ？

タエ登場。イツキとソウタは気づかない。

イツキ あのね、昨日の署名ね、あれね、

ソウタ うん？

イツキ あれって、どうして？

ソウタ どうしてって？ 言わなかった？

イツキ ううん、聞いた。

聞いたんだけど、ずっと考えてて、もしかして、あの「テスト死ね」、

ソウタ テストの名前死ね。

イツキ あのね、自意識過剰だっと思わないでね、あれね。

タエ、前に出る。

タエ イツキ！

イツキ タエ。

タエ イツキに朝から会えるなんて、うれしい。

イツキ あー…そんな（騒がれると…）

タエ やったじゃん、ソウタ。

ソウタ あ、

イツキ え？ なに？

ソウタ あー…そうだよ、タエ、なんだよ。

タエ いやいやいや、ソウタはやってくれると思ってたよ。

うんすごいよ。「テストの名前死ね」、あれね、先生たちにも効いてるみたいよ。

ソウタ タエ、

イツキ あ、あれ、タエのため、だったんだー

（笑って）そっかー

タエ ううん、あれね、あたしの頼みをソウタが聞いてくれたのはそうなんだけど、究極の目的はイツキが学校に（来てくれる…）

ソウタ （大声で）タエ！

問

ソウタ （イツキに）あのさ、

タエ でもこんな簡単にイツキが学校に来るなら、最初からソウタに頼めばよかった。

ソウタ イツキ。

タエ イツキ、最初から言ってくればよかったのに。

何が嫌で来ないとか来たくないとか、言ってくればよかったのに。

言ってくれなきゃわかんないから。

：

イツキ
ソウタ イツキ。

イツキ ソウタ君。

タエも…ごめんね。

私、いろんな人に気を遣わせて…迷惑かけて…

ソウタ イツキ、おれ、

イツキ ソウタ君も、ごめんね。

私…ちよっと、帰る。

引越し、引越しの準備しなきゃ。じゃ。

イツキ、去る。

暗転

――イツキとアンナは冬眠する。

イツキとアンナは、少し離れて眠っている。

アンナ　グーグー。

イツキ　：

アンナ　グーグーグー（イツキを見る）

イツキ　：

アンナ　あゝ（あくび）

イツキ　：

アンナ　ねえイツキ。

イツキ　：

アンナ　冬眠は退屈ゝ

イツキ　冬眠中は話しかけない。

アンナ　ねえ、

イツキ　：

アンナ　なんでメモ帳抱いて寝てるの？

イツキ　冬眠中。

アンナ　いつまで冬眠中？

イツキ　いつまでも。

アンナ　あ、春？　春が来るまで？

イツキ　：

アンナ　早くこないかなー、春。

イツキ　あたしたち、ずーっと冬眠してるから。

アンナ　ずっとじゃない。

イツキ　えー？

アンナ　あれから：ほんの１週間かそれくらい：

イツキ　うそ。ずーっと冬眠してるって。

アンナ　：あーあ、ここは真っ暗な、木の幹の中：

イツキ　：

アンナ　退屈なので、おとなりさんに、となりの巣穴からお話をしてあげましょう。いい？

イツキ　：

アンナ　昔あるところに、動物のきょうだい、ううん姉妹がいました。

（少し考えて）シマリスの、姉妹です。名前は、リス美とリス子。

リス美とリス子は全然仲良しじゃなくて、ドングリを取り合って、けんかばかりしていました。

だから冬眠のときも、しょっちゅうお互いのお腹とか尻尾とか噛んだり蹴ったりしていました。

そんなあるとき突然、姉のリス美はお母さんと一緒にツナミに流されてしまいました。

巣穴にはリス子だけが残されました。

(間)

しばらくしてリス子は夢を見るようになりました。

リス美はリス子の夢に出てくるようになりました。

リス美とリス子は夢の中では仲良く遊びます。いつまでも遊びます。でもそのうちリス美は心配になって、リス子の夢の中で言います。

「これは夢だよ、リス子」

「起きてよ、リス子」

間

イツキ

夢じゃないよ。

アンナ

夢みたいなもんだよ。

イツキ

夢じゃないよ。

だって、だって、夢だったら怖くないじゃん。

アンナが消えてしまうかもしれない、って思うから怖いのに。

ふっと現われたみたいに、ふっと消えてしまうかもしれない、って。

ねえ、アンナ、消えないよね？ 消えたりしないよね？

呼び鈴の音「ピンポーン」

イツキとアンナ、そのままストップモーション。

12 タエとソウタ、よくわからなくなる。

タエとソウタ。

タエ

話なら教室でもできるんじゃない？

ソウタ

学校、来てないよね。

タエ

：

ソウタ

イツキ、あれからずっとだよね。

タエ

：

ソウタ

タエはさー

タエ

：

ソウタ

タエは、イツキの気持ちがわかってないと思うんだよね。

タエ

わかってる。

ソウタ わかってない。

タエ ソウタはわかってるの。

ソウタ あのさ、

タエ 少女マンガか。幼なじみだからわかってる！、とかか。

別冊マーガレットか！ 花とゆめか！

おまえは山崎賢人か！

ソウタ タエ、何怒ってんだよ。

タエ ！ソウタだって、あたしの気持ちわかってないし。

ソウタ お前の気持ちってなんだよ。

タエ あたし、ソウタが好き！

ソウタ ええ？ いやあゝ（と照れる）

タエ ！は、置いというて。

ソウタ 置いとくのかよ。

タエ あたしはイツキも好き。

ソウタ わかってるよ。

タエ じゃあ、何がわかんないのよ！

ソウタ え？ えーと…あーもー！ わかんなくなった！

タエ ！あたしが怒ってるのはね、

ソウタ そうだよ。それぞれ。何を怒ってるのかっていう、

タエ わかんないよ。でも、イツキにもソウタにも怒ってる。

あたし、何かいろいろ秘密にされてる気がする。

ソウタ なにを。

タエ ！わかんないけど。

ソウタ ！タエ、なあ、全部わかんなきやダメ？

タエ そもそも気持ちをわかって言ったの、ソウタだよ？

ソウタ ん？ あ、え、そうだった。

タエ わかってないのはソウタだよ。

ソウタ でも、気持ちってさ、気持ちってさ、

そんな簡単にわかるもんじゃないじゃん。

イツキが学校に来ない理由とかさ、

タエ でも、でも！

イツキは何も話してくれないんだもん。

あたしは！ 話してほしいの！

ソウタ タエ…

間

タエ メモ帳だ。

ソウタ え？

タエ イツキのメモ帳。

ソウタ え？

タエ あれになら全部書いてある！…かもしれない。

タエ、走り去る。

ソウタしばし呆然。少しして追いかける。

13 三人は三角関係を解消する。

呼び鈴の音「ピンポーン」

前々場のつづき。

イツキとアンナ、ストップモーションがとける。

イツキ はい。

イツキ、ゆっくりと舞台の外へ。

イツキ （何か紙袋をもって）田中さんだった。

田中さん、おばーさんの施設決まったって。

引っ越しするって。

てゆうか、もうトラック来てるって。

イツキ （袋に）引っ越し祝いだ…なんだろう。あれ？？ これ、引っ越し祝いって言うの

かな。

逆引っ越し祝い？ まあいいか。

イツキが袋から、紅茶花伝を取り出す。1本、2本、3本…全部で十本。
紅茶花伝をボーリングのピンみたいに並べる。

イツキ （並んだ紅茶花伝を見て）多すぎ。

イツキ あー、田中さんが引っ越しとなると、
住宅は取り壊し、立ち退き決定だね…。

再び呼び鈴の音「ピンポーン」

タエ、イツキが出るのを待たずにぐいぐい入ってくる。

タエ
イツキ！
タエ。

タエ、紅茶花伝を1本、イツキに突き出す。

イツキ
どしたの？
タエ
イツキ、紅茶花伝好きじゃん。
イツキ
う…うん？
タエ
（紅茶花伝の群れを見て）ほら、そんなに。
イツキ
う…うん？

間

イツキ
タエ、どうして（と言いかける）
タエ
イツキ、ソウタのこと、好き？
イツキ
ええ？

タエ
イツキ、ソウタのこと好きだよね？
好きだから、学校来なくなったんだよね？
待つて待つて、なにそれ。

タエ
だって、だって、考えたら、
イツキが学校に来なくなったのって、あたしとソウタが付き合いだしてからじゃない？

イツキ
え？ ああ…いやいや。
タエ
あたし、イツキのこととソウタのことと、それからあたしのことと考えたら、
そしたら…、

イツキ
あ、告白のこと？
タエ
こくはく？

イツキ
私がソウタくんに告白されたのって、あれね、あれ、
えええっ？

ソウタが、イツキに告ったのー？
え、え、違う…
タエ
ソウタ、あの二股やろー！！

ソウタ、走って登場。

ソウタ
タエ！
タエ
ソウタ。
イツキ
ソウタ君。

三人、きれいな三角形を描く。

タエ （大声で） なに、この絵に描いたような三角関係はー。

イツキ、動いて、三角形をくずす。

イツキ 三角関係じゃないから！

タエ 三角関係じゃないの？

ソウタ 三角関係ってなに。

イツキ 告白は！ 幼稚園のころの話だし。

ソウタ 告白？

タエ ソウタが告白したの？

ソウタ え？

イツキ うん。

ソウタ え？

イツキ 幼稚園のときだよ、幼稚園。

ソウタ あー（と納得。）

タエ そのころからつきあったのー？

イツキ だからつきあってないってー

ソウタ あのさ、

タエ うるさい！

ソウタ はい。

間

イツキ タエたちがつきあい出したのと、

ソウタ 私の、私が学校行かないことは、なんにも関係ないから。

ソウタ あのさ、

タエ ソウタはうるさい！

ソウタ はい。

間

タエ イツキ、それほんと？

イツキ ほんと。

タエ ほんとにほんと？

イツキ ほんとにほんと。

タエ じゃあ、じゃあね。

約束してくれる？

イツキ、あたしに会いに、学校に来てくれる？

イツキ …

タエ ねえ。

イツキ (いやいや? あいまいな感じでうなずく)
タエ ねえ、イツキ。

忘れないように、メモ帳に書いてくれる?

イツキ メモ帳?

タエ メモ帳に書いてくれたら、信じる。

イツキ メモ帳…

イツキ、メモ帳を押さえようとしてないことに気づく。

イツキ え? あれ? どこに行った? あれ?

イツキ、メモ帳を探す。

自分の行動を振り返り、

イツキ 田中さんが来て、玄関に行つて、あ(紅茶花伝を見る)!

田中さんだ! 田中さん!

田中さんにメモ帳を渡しちゃったんだ!

イツキ、慌てて舞台の外へ。

タエとソウタが残される。(アンナも)

タエとソウタ、ふと見ると、メモ帳が落ちている。

タエ あった!

ソウタ イツキの!

二人、メモ帳をめくる。

ソウタ え? なにこれ。

間

タエ 真っ白じゃん。

…なんにも書いてない…。

14 エピローグの一手手前。

照明が狭く当たる。

シヨールとカナエが登場。

シヨール どうも

カナエ どうも

突然ですが、学校に行きたくないけど行くとき。

カナエ 学校に行きたくないけど行くとき。

シヨール 留年しそうなとき。

カナエ いきなりそこですか。

シヨール じゃあ、テストのときー。

カナエ あるある。

嫌いな教科の、好きな授業のあるとき。

カナエ (はい、と手を上げて) よくわかりません、先生！

シヨール じゃあ、他には？

うーん、(はい！) クラスメイト相手に失恋したとき

シヨール あー、あるある：かあ？

相手の顔も見なくなっちゃって、そもそも行きたくない？

ってゆうか、行かない。

カナエ ううん、行かないと、失恋して欠席しちゃうほどショック！

ってのを認めちゃうことになるから、

そこは必ず行かなきゃ。

シヨール うーん、あたし、よくわかんないかも。

カナエ (かぶせて) 学校に行きたくないけど行くとき

シヨール 行くとき

カナエ 友だちと約束のあるときー

シヨール あるあるー。

二人顔を見合わせて、

シヨール・カナエ イエーイ(と、ハイタッチ)

シヨール あれ、待って？

「行きたくないけど行くとき」だよな？

友だちと約束してるのは、行きたくないの？

二人顔を見合わせて、

シヨール・カナエ イエーイ(と、ハイタッチ)

シヨールコ あ、あたし、もう一つ思いついたかもしれない。
カナエ なになに。

シヨールコ 学校に行きたくないけど行くとき
カナエ 行くとき

シヨールコ 学校の他に行く所がないとき。

間

シヨールコ・カナエ (低い声で) イエーイ。

照明切り替わる。

15 エピローグ

イツキとアンナ。

イツキはメモ帳を抱いている。

前々場の続き。

イツキ だって、書き込んだりできないよ。

アンナ

：

イツキ ようやく見つけた：お父さんの実家にかろうじて残ってた、

アンナの、お姉ちゃんの、ものだから。

アンナ

：

イツキはメモ帳をしまう。(どこに?)

※注

イツキ ねえアンナ。

わたしね。タエに、ホントの気持ち言ってるって言われたときね。

なんでだか田中さんのおばーさんが頭に浮かんだ。

前に、おばーさんが話してたことあるの。

イツキちゃんはいいいね、って。行くところあるからいいね、って。

学校行けるからいいねって。

おばーさん、ここの住宅来てから、どこも出かけていく先がないから。

イツキ

おばーさんね、その角まで、紅茶花伝買に行くくらいしか、出かける所なかったのかなあ。

毎日、飲みもしないのに、紅茶花伝買ったのかなあ…。

ね？ アンナ。

わたしさ、さっきのあれ、失恋したことになるのかなあ？

：

失恋。ソウタ君に、失恋したことになる？

：

だいたい、わたしはソウタくんのこと、好きだったの？

：

もしそうだとしたら、きっと傷つくよね？

でも、なんか、傷ついて…ない気がする。

：

でもいっかー、失恋の練習でも。いつもの練習。

あ、失恋のフリか。うん、それもいっかー。

ソウタ君だって、やさしいけど、やさしいフリをしてるだけかもしれないし。

でも、やさしいフリができるってことは、やさしいってことだね。

あれ？ 意味わかんないか。

アンナ徐々に消えていく。

イツキ

あ、思ったんだけど、

みんな学校に行くのも、学校に行くフリをしているだけかもね。

うん、そうかも。

だとすると、私、学校に行くときは全力で頑張って行ってたけど

行くフリをしてもいいかもしれない。

行くのがちょっと難しくても、行くフリなら、できるかもしれない。

イツキ

タエが言った約束も。

約束しなくてもいいよね？ アンナ。

だって、約束したら行かなきゃならないけど、

してないなら、タエに会いたいから行くことになるじゃん。

イツキ

ねえ、アンナ？ …アンナ？

イツキ

もしかして、アンナも消えたブリ？

イツキ

でもわたし、平気な気がする。

だって、アンナがいるフリならいくらでもできるから。

アンナがいるフリをしながら、学校に行くし、

アンナがいるフリをしながら、友だちと話して、

アンナがいるフリをしながら、自己嫌悪したり

アンナがいるフリをしながら、傷ついたり…。

イツキ

アンナがいるフリをしながら生きていくから。

ねえアンナ。 アンナ？ アンナ…

音楽

幕

※注

この作品は、作者が当時執筆したものをそのまま掲載しています。

該当部分（35ページ中央の「どこに？」）は、

執筆当時、イツキがこの後に持っていたメモ帳を手ばなし、アンナがそれを抱いていなくなる、という上演時の演出の前段階であり、不確定だったためです。

〈おねがい〉

この戯曲は、「佐藤かつら戯曲館」への掲載にあたり記号の表記などを一部改めて打ち直し、体裁を整えたものです。ダウンロードして練習脚本などとしてお使いいただくことができます。実際に上演される際は「佐藤かつら戯曲館」ホームページにあります「上演を検討される方へ」をお読みの上、ご連絡ください。

〈参考〉

2019年上演時の使用楽曲

- ・Curly Giraffe 『My Dear Friend』
- ・ランゲ 『花の歌』
- ・fishing with john 『ウサギ泥棒』
- ・バッハ 『平均律クラヴィーア曲集 第1巻 第1番 ハ長調』
- ・シューマン 『トロイメライ』
- ・ショパン 『雨だれ』